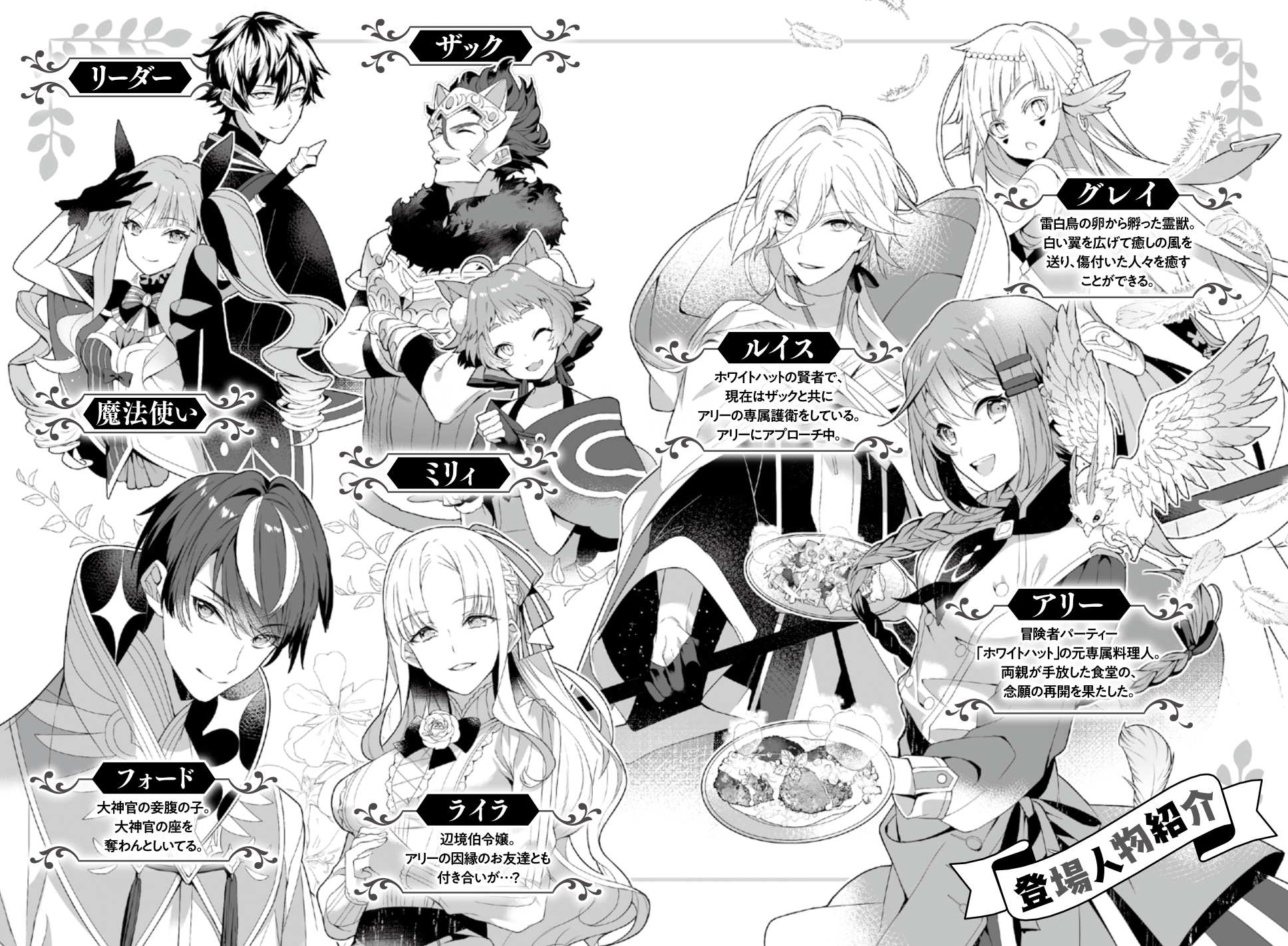
専属料理人なのに、料理しかしないと追い出されました。2


登場人物紹介
リーダー
魔法使い
ザック
ミリィ
ルイス
ホワイトハットの賢者で、
現在はザックと共に
アリーの専属護衛をしている。
アリーにアプローチ中。
グレイ
雷白鳥の卵から孵った霊獣。
白い翼を広げて癒しの風を
送り、傷付いた人々を癒す
ことができる。
アリー
冒険者パーティー
「ホワイトハット」の元専属料理人。
両親が手放した食堂の、
念願の再開を果たした。
フォード
大神官の妾腹の子。
大神官の座を
奪わんとしいてる。
ライラ
辺境伯令嬢。
アリーの因縁のお友達とも
付き合いが…？

目 次

◆ 本編３・Gazing at our roots　7

◆ 本編４・To the shining future　137

◇ ライラの幸福　250

◇ ズルい彼女の幸福　264

◇ 硝子（ガラス）の幸福　277

◆ 特別編・What day is today? ~again~　288

◆本編3・Gazing at our roots

もうすぐSランクにも手が届きそうだという、冒険者パーティーのホワイトハット。

私はそのパーティーで、専属料理人として約一年間、可もなく不可もなく過ごしてきたつもりでした。しかしあと数日で契約期間も終わるというあの日、突如パーティーを追放されたのです。

しかもダンジョン最下層のラスボス部屋の前に置き去りという、かなり手酷(てひど)い餞別(せんべつ)までいただいてしまいました。

もちろん無事に生還したからこそ今日の私がいるわけですが、ギルドでの断罪を終え己(おのれ)を省(かえり)みて、気が付きました。

私はメンバーに対して仲間意識が持てていなかったのです。

両親の思いが残る食堂を買い戻したい。だから我慢しなくちゃ……私が一年間我慢すれば全てが終わる……

本来ならば仕事だと割り切って考えるべきところを、たとえ一年間とはいえ、専属になどなりたくなかったと思う気持ちを優先してしまったのでしょう。

期間限定とはいえ私たちは仲間だったのです。私がホワイトハットのメンバーに遠慮をせず、資金繰りや食材についてざっくばらんにでも話をしていたなら、違う道があったのかもしれません。仲良く打ち解けていたなら、あの追放もなかったかもしれないのです。

『料理が旨いと幸せな気持ちになるよな』

『美味しかった。次は子供や孫も連れてくるよ』

そんなお客様のさりげない言葉が毎日の心の栄養だと常に話していた、今は亡き両親。

そうです。これらの言葉は料理人にとって最高の賛辞です。私もホワイトハットのメンバーもきっと、冒険者として、料理人としての、それぞれの初心を忘れていたのでしょう。

ホワイトハットのメンバーには、一年間の反省期間が与えられました。

一年後の再会を果たすときには、私もキチンとメンバーに謝りましょう。そして最後の晩餐となったあの皮肉なダンジョン料理ではなく、キチンとした最高の料理を振る舞いましょう。

あ！　もちろんあの料理も最高傑作ですよ。素晴らしいバフ（効果）も付きましたし、皆さんしっかりとおかわりもしてくれましたから。

そして私はなぜかメンバーのうち二人を専属護衛とし、両親の食堂を開店させるという夢を叶えたのです。

それと並行して、出張料理も頑張っています。

食堂を開店するにあたり、出張料理はやめようかとかなり悩みました。しかし人手に渡ってしまっていた両親の食堂を買い戻す際の、多大な資金源となってくれたのが、出張料理のお客様たちなのです。

貴族様がメインの顧客である出張料理では、多額の利益が生まれます。多くが町中の食堂に気軽に来店できるような方ではないので、私の料理が食べられなくなることを、皆様が大変惜しんでくれたのです。

私は町中の両親の食堂が大好きです。その食堂を再開できたら嬉しい。それだけを目指して走り抜いてきました。

でも、それだけではなかったのです。

私はたくさんの人に美味しい料理を作りたい。私の料理で幸せを伝えたい。

だから一つに絞ることをやめました。

どちらもこなすには人々の協力が必要です。その協力をしてくれる人々が、私の周囲にはいるのです。

私はもう間違えません。周囲から差し出される手に頼ろう。一年前のホワイトハットとの契約が、間違いだったとは思いたくないのです。自身の不足を知り、精神的にもたくさん勉強もしましたから。

でももしあのとき、融資の手を差し伸べてくれていた商業ギルドさんや、出張料理常連の貴族の方々の言葉と気持ちをキチンと聞いていたならば……。借金はしたくないと意地を張り、頑なにお

断りしてしまった当時の私。それが自分ばかりではなく、商業ギルドや冒険者ギルドにまで迷惑をかけることになったのです。果てには魔物討伐を請け負う辺境の方々にまで及び、本当に反省しきりです。

こんな私を案じていてくれて、ありがとうございます。更にはこれからのサポートまで！　皆様には本当に感謝ばかりです。

そんな皆様のご協力のおかげでころポックル亭も無事に開店し、毎日が忙しく過ぎてゆきます。

今日のランチも満員御礼。多めに用意していたはずのメイン材料が品切れしそうになり、急遽ザックに冒険者ギルドまで走ってもらうほどでした。品切れになる前に、ザックが戻ってきてくれてひと安心。貴重なお肉がまだ冒険者ギルドに残っていて、本当に良かったです。

卸しに回されたあとでは各地の貴族様や商会に買い占められ、町のお肉屋さんまではなかなか回ってこない、あるいは高額すぎて入荷できない、それくらい貴重な食材を使用したのです。

そうなのです！　なんと今日のランチは……

ドラゴンステーキ！

実はこのドラゴンは、ホワイトハットの昇級試験のときのラスボスです。残念ながらあの昇級試験は出来レースで、予定通りホワイトハットは不合格となりました。これは、昇級試験官であったお兄ちゃんズが退治してくれたものです。

ドラゴンが討伐されることはなかなかありません。つまり希少で、お高いのです。普通に仕入れたら、ランチでステーキとして提供などできません。

そのため私は、通常では調理に手間がかかりあまり売れない部位や、肉質が固すぎて廃棄される部位などを、通常の部位と共にまとめてお安く大量購入したのです。

特に今回は、絶対に売れる！　そう判断して、通常はA、Bと二種あるランチをドラゴン料理のみに絞りました。

他にはステーキサラダにブラウンソースの煮込み、ドラゴンカツなど、単品でも数種用意しましたので、少食な方でも安心です。

煮込みには固くて廃棄されるような部位を使用しましたが、丁寧に下処理をし時間をかけて煮込んだため、とても柔らかくなりました。口に入れるとホロホロと崩れるお肉。手間はかかりましたが、そのぶんお安く提供できるのです。お子様にも評判です。

中にはランチメニューのドラゴン料理全てを食べ尽くそうとした猛者も……

確かにドラゴンは美味です。美味しくたくさん食べていただけるのは、料理人冥利に尽きます。

しかしさすがに食べすぎは……

案の定脂汗を流しながら、ラストのカツをじっと眺めるお客様。大丈夫でしょうか？　お腹のベルトが弾けそうです。

無理をしても美味しくは食べられません。失礼ながら一声おかけして、カツはサンドイッチにしてお持ち帰りしていただきました。

それを見ていた店内のお客様たちから、我も我もとサンドイッチを頼まれ……ドラゴンのお肉が足りなくなってしまったのです。走ってくれたザックに大感謝です。

さあ、ようやくランチの営業が終了です。さっと片付けて、賄いの準備を始めましょうか。下準備は済んでいるので、あとは焼いたり揚げたりするだけです。

「はぁ……ドラゴンを退治したときの、お兄ちゃんズの魔法は芸術だったよねー。魔法陣ってすごい……私にも魔力があればなぁ……」

ドラゴンカツを油で揚げながら、いつの間にか思考が口に出ていたようです。ひとり言はさすがに恥ずかしいです。

慌てて振り返ると、ザックとルイスはすでに席に座り、何やらヒソヒソ話をしています。二人はホワイトハットの剣士と賢者です。

どうやら聞こえてはいなかったようです……ね？

「アリーに魔法はいらん。風のスキルだけでも十分すぎるのに、更なる凶器を持たせるな。ヘタすりゃ爆弾娘だ」

聞こえていたんですね……しかしザック、その言い方は酷すぎませんか？

「そうですね。その通りです。アリーに魔力がなくて幸いでした。風のスキルであのレベルです。なんでも大ごとにしてしまうのがアリークオリティ。もしも魔力があったなら暴走娘と化し、抑えることが困難となるでしょう」

ルイス、アリークオリティってなんでしょう？

しかし二人はおバカなのですか？　まだまだ私の性格を理解していませんね！　これから賄いの時間なんですよ？

……先日広場で結界と風のスキルを使って悪人たちを懲らしめたのが、えげつないと？　無茶をしすぎだと？　無茶は確かに一理あるかもしれません。ですが！

「アリー師匠は何もおかしくないのです！　やられたら倍返しは、みみ族でも当然の掟なのです。普段の私たちだったなら、アイツらはフンドシ一丁で市中引き回しの上、磔の刑に処すのです。おかしいのは悪人たちなのです！」

「「恐るべしみみ族……」」

「ミリィちゃん。助っ人ありがとう。でもフンドシってなぁに？」

「「……」」

あら？　みんな黙っちゃった。聞いたら駄目だったの？

私の代わりに二人を怒ってくれたミリィちゃんは、猫みみ族の女の子です。以前、種族固有スキルを狙って襲われていたところを助けてから、私のお弟子さん一号となりました。

それより、賄いは熱々のうちに食べましょう。お兄ちゃんたちも来たので、みんなで揃って少々遅いランチです。

「さぁ、ミリィちゃん。熱々をどうぞ」

「ドラゴンステーキなんて初めてなのです！　うわー。スッと切れちゃいます。はふっはふぅー。めっちゃ柔らかくて美味しいのですー」
　ミリィちゃんの可愛いお耳がピンと立ち、尻尾がフリフリと揺れています。よほど気に入ってくれたのですね。美味しいという言葉とあふれる笑顔は、料理人にとって最高の賛辞です。
「ステーキ？」
「ス……ステーキなのでは？」
　はい。ステーキですよ？
　テーブルに並べたランチを前に、なんだかルイスとザックの様子がおかしいですね。お兄ちゃんたちはもうお皿に手を伸ばしていますよ？
「「すごいな……さすがアリーだ。この滴る肉汁と焼き加減。塩と胡椒の加減もバッチリだ。もちろんこの煮込みも美味い！　普通なら破棄される、あの筋だらけの固い部位がこうなるとは……」」
「丁寧に筋切りをし、あまりに太く固い筋は取り除くの。更にじっくりコトコト煮込めば、残った筋まで柔らかくなるわ。作業の際に細かくなってしまったお肉は叩いて挽き肉にすれば、ハンバーグにしてパンに挟んで売店で販売してもいいし、パテ風にしてカナッペみたいにしてもお洒落よね。今度の出張料理でも出すつもり。でもそれはお茶会だから、さすがにステーキを出すのはね？」
　……お兄ちゃんたちが、ルイスとザックをチラリと見て目配せしてきます。
　わかってますよ。もう……仕方ないですね……

　実はお兄ちゃんたちとルイスとザックに出したものは別のメニューなのです。お兄ちゃんたちには普通のドラゴンステーキを、ルイスとザックには、ステーキと名の付くハンバーグステーキを提供しました。
「ルイス、ザック、ステーキですよね？　しかも特大ですよ」
「「反省しました。普通のでお願いします」」
「わかりました。でもそのビッグハンバーグステーキは食べてね。お残しは許しません。ソースの種類をたくさん用意してあるから、色々なお味が楽しめるわよ。次のおかわりは普通のステーキを出しましょう」
　二人はようやく食べ出しました。
　まったくもう！　毎回毎回憎まれ口を叩くからよ！
　ん？　お兄ちゃんたち、二人に何をモソモソ話してるの？　風のスキルで聞き耳立てちゃうぞ。
　～風よ、音を拾い拡散せよ～
『まったくバカなやつらだな。思ったことを正直に口に出すな。大人になれ。アリーはまだまだガキだから、ついつい意地悪で返してくるんだ。口は災いの元だ』
　声を風にのせ部屋中に拡散します。丸聞こえです。お兄ちゃんたち……
「違うのです！　アリー師匠はガキではありませんし、意地悪でもないのです！　意地悪を言うのはその二人なのです！　無礼を働くならば私が成敗するのです！」

ミリィちゃんナイスよ！

「ミリィに俺が成敗できるのか？　みみ族は身体能力が高いと聞くが、森で盗賊に追われたときは逃げるので精一杯だったんだろ？」

「ザックさん……ならば私と一対一で勝負をしてみるのです！　あの森では怪我人を庇い、わざと木々の深い奥地に逃げ込みました。密集した木々が邪魔をして動きが鈍りましたが、みみ族は開けた平地なら野生の動物くらいには負けないのです。イノブー数匹なら素手で倒せますし、魔物もグリズリー系やウルフ系ならば、ホークの武器さえあれば一発で倒せるのです！　どうです？　やります？　中庭に出るのですか？」

「……いや……すまん……」

なぜ私の周囲の男性たちは、こう遠慮がないのでしょう。

「あのね、私は意地悪をしているのではないの。思ったことを正直に話すのは悪いことではないけれど、少し話し方に配慮してほしいのよ。わかりましたか？」

私は机をバンと叩いた反動で席を立ち、四人に向かって話します。

「お兄ちゃんたちの次のおかわりは、普通サイズのハンバーグステーキと、ビッグハンバーグステーキ、どっちがいいかしら？　ぜひともたくさんのソースを味見してもらいたいんだけど……」

「「ふ、普通のでお願いします……」」

「アリー師匠、私もドラゴンハンバーグステーキが食べたいのです！　三人前焼かせてください！」

「ではミリィちゃん、お願いします。丸めて保管庫に入っているから、教えた通りに焼けば大丈夫。よろしくね」
ミリィちゃんがエプロンを締め直し、キッチンへと向かいました。私はクルリと振り返り、残った四人に続けます。
「ちなみにドラゴンの通常の部位では、安価なメニューであるハンバーグなんてとてもじゃないけど作れないわ。ハンバーグとステーキが同じ値段なら、大人はたいていステーキを食べるわよね？でも子供たちはハンバーグが大好きだし、大人の懐事情もあります。安くて美味しいドラゴンのハンバーグを食べたら、なんだか子供たちの夢も広がりそうじゃない。だから手間と時間をかけてまで、安い部位で作っているの。キチンと味わって食べてくださいね？」
「「「はい！」」」
そんなことをしている間に、ハンバーグを持ったミリィちゃんが戻ってきました。
「アリー師匠ー。ハンバーグ美味しいのですぅー。モグモグ……チーズソースもホワイトソースもブラウンソースも、どれをかけても美味しい……こ、これは！　すりおろしリンゴのソースなのですか？　すりおろされたリンゴの酸味が、ドラゴンハンバーグの脂に絡みサッパリと食べられちゃうのですー。噛むと感じるリンゴの甘味がたまりません！　トマトソースもハニーマスタードソースもレモンバターソースも……どれをかけても――」
「黙って食え！」

「い……痛いのです！　ザックさんのバカー！」
ミリィちゃんが叩かれた頭を押さえている隙に、ザックが彼女のお皿に自分のハンバーグをのせています。
「あれ？　お皿のハンバーグが増えているのです！　なら今度はこのニンニクソースで食べちゃうのです。んー、頬っぺたが落ちちゃうにゃ。美味しーにゃぁん」
あら？　ミリィちゃん、今にゃんって言ったかしら？
ルイスもこちらを見ていますね。ザックは下を向きプルプルと震えていますが、どうしたのでしょう？
ルイスがザックを覗き込み、呆れた様子でお手上げのポーズを取りました。……あ！　そういえばザックはモフモフ好きでしたね。
ミリィちゃん、可愛いは正義です。しかしザックの前では……危険です。
ザック、その膝の上でワキワキと握った手で触れては駄目です。いくらナデナデしたくても、モフモフは許可を取ってから！　以前に注意されたはずですよ。
こら！　ハンバーグをさりげなくミリィちゃんのお皿に移さない！　……『可愛くてハンバーグも減って、一石二鳥？』こらザックー！
「すごいのです！　ドラゴンハンバーグは増えるのです！　なら食べるのみです！　んー頬っぺが落ちちゃうにゃあん！」

……ザック、さすがにストーップ！　可愛らしいからって駄目です！　ミリィちゃんの言葉がにゃん語になってしまいます！

さて、今日はころポックル亭の定休日。私がころポックル亭と出張料理の料理人として再出発してから、初めての出張料理のお仕事です。

現在私とルイスの二人でとあるお屋敷を訪問しています。しかしなぜか、ルイスと同じ護衛のはずのザックはいません。ちなみにミリィちゃんは、移住したばかりのみみ族の村に里帰りしています。

『定休日でも、ころポックル亭の売店を必要としている冒険者はたくさんいるはずだ！　俺はやつらのためにも、留守を預かる！』

とか申し開きをして、最後には、俺は絶対に嫌だと逃げ出したザック。

貴族様が苦手なのかと思いましたが、どうやら違ったようです。ルイス曰く、ザックはどうしても、商業ギルドが作ってくれた制服が嫌なんですって。確かにこの制服は、着る人を選んでしまうかもしれません。商業ギルドのお姉様たちが、萌えを追求したデザインなんだとか……

実は食堂の制服も商業ギルド製です。私はとても気に入っていて、ダンジョンへ潜る際の服も作ってもらいました。どちらもかなりの高性能なんです。

しかし……このデザインでは、確かにザックには辛いかもしれませんね。ルイスは妙にはまってますけど……

出張料理の際には、商業ギルドから毎回お手伝いの方々が来てくれます。皆さん即戦力になる方ばかり。商業ギルドでは、若者の人材育成にも力を入れているのです。

つまり私は会場へ行って料理をし、指示を出すだけ。

商業ギルドさんとは、両親が生きていた頃からのお付き合いです。本当にお世話になっています。

さあ、いよいよお茶会スタートです。

今回のご依頼主は、私がまだ屋台で販売をしていた頃からのお得意様の辺境伯です。お茶会のテーマは、元気の出るお茶会。

主役である辺境伯のお嬢様は、先月二十歳のお誕生日を迎えられました。そしてビックリです。同日に二人目のお子さんが誕生したのです。本日はその赤ちゃんのお披露目と、育児に疲れ気味のお嬢様を元気付けるためのお茶会なのです。

お嬢様は二十歳にして二人の子供のお母さんです。本当に幸せそうなご家族です。しかしこれまでにたくさんの苦労があり、辛い経験をされてきました。それらを乗り越えて掴んだ幸せ。まばゆい笑顔に乾杯です。

私もいつか、幸せな家族を得たいです。亡き両親のように笑い合える、温かい家庭を持ちたいのです。しかし、自分がそうなるイメージはまだまだわきません。やはり恋愛偏差値というものが低

いのでしょう。
　というのも、先日、虫退治に忙しくて目が回ると騒いでいるルイスとザックに、何かお手伝いできるか聞いたのです。そうしたら揃いも揃って同じことを！
　二人して私はまだまだお子様脳だから！　と前置きした上で……
『虫の意味がわからないアリーには無理！』
　く、悔しいです。私だって虫が指すものくらいわかります。
　私にわくかは微妙ですがさすがのお二人、退治に忙しいとは本当にモテモテですね。特にルイスがすごいんです。売店の売り子をしてもらうと、女性に囲まれ黄色い声が飛びまくり、売り上げにもかなり貢献してくれています。まるでアイドルのようですね。
　そういえば、毎年夏に看板娘コンテストが開催されるのですが、商業ギルドが後援しているので景品がとても豪華なのです。出場者は基本的に女性ですが、ルイスなら難なく優勝できそうですね。これはぜひとも出場してもらいましょう。さすがに女装は嫌がりそうですから、裾の広がったキュロットか、浴衣辺りが無難そうです。これはめっちゃ楽しみです。ニヤリ。
　私も十八歳になり、成人しました。十六歳で結婚もできるんです。お酒も飲みましたし、もう立派な大人の女性なんですよ？
　しかしお店のお客様まで、私を子供扱いするのです。やはりこれは色気というものが足りないのでしょう。ダンジョンでは、下着のことで散々笑われましたからね。早々に下着を買いに行かねばなりません。
　……なんてついつい余計なことを考えてしまいました。会場のセットが完了して安心してしまったからでしょう。さあ、頭を切り替えてお茶会に意識を戻します。
　全体的にパステルカラーのメルヘンチックなお茶会会場。元気な様子をイメージした原色に近いポップな感じも捨てがたかったのですが、今回は赤ちゃんのイメージを考慮して、パステルに決定しました。
　中庭と繋がるメイン会場のお部屋には、円形の大きなテーブルが三台。お茶会中は開放される中庭でも寛げるようにと、イスと小さめのテーブルが随所に設置されています。お料理はスイーツタワー三台がメインで、全て室内に用意しました。
　一つ目は色とりどりのマカロンタワーです。生クリームでマカロン同士を接着し、数種のベリーをトッピングして高く積み上げました。
　次は、色とりどりのクリームを巻いたロールケーキタワーです。
　中のクリームはクリームチーズをベースとして、クリームのお色とお味を変えました。レモン果汁入りのクリームチーズで白、苺のピンクやオレンジの橙、ブルーベリーの紫にキウイフルーツの緑などをクルリと巻きました。使用した果物のジャムやソースも、トッピングとして用意しています。こちらのロールケーキもタワー状に積み上げてフルーツを飾り付け、ラストは上から粉砂糖を雪のように振りかけました。

最後はシュークリームタワーです。小振りなシュークリームはカスタードクリームとバナナ入り。積み上げて、仕上げに溶かしたチョコレートを垂らしました。パリッとしたチョコとバナナの相性が抜群です。

今回は大神殿裏の聖なるダンジョンで採れたフルーツが大活躍しました。海産物も、オードブルやサラダになって大人気。雷白鳥の卵で作ったプリンは足りなくなり、急遽厨房をお借りして追加しました。

ルイスの提案してくれた巨大白ころ茸のサラダとグラタンも好評で、ころポックル亭でも新たに提供する予定です。

グラタンは大きな白ころ茸を器に見立ててポテトとホワイトソースを詰め、チーズをたっぷりとかけて焼き上げました。

さすがにそのままでは大きいので半分にカットし、ホウレン草を練り込んだスパゲティーを添えて取り分けます。カットするとチーズがトロリとあふれて見た目も最高です。

添え物をマッシュポテトにし、スパゲティーを中に入れても美味しそうですね。まだまだ改良の余地ありです。

通常のお茶会ではお客様がほぼ女性のため、提供するお料理は甘いお菓子がメインとなります。

しかし今回は赤ちゃんのお披露目も兼ねているので、男性も多く参加しているのです。

そのため、軽食を増やすべく、ここでドラゴンのお肉の登場です。ドラゴン肉のパテをのせたカ

ナッペや、ドラゴンカツサンドにドラゴンハンバーガーなど……全てをお茶会仕様に小さめに作ったのです。珍しいドラゴン料理に皆さん驚き、そして喜んでくれました。

しかしやはりお茶会なので、男性方にもスイーツを楽しんでほしいのです。

そこであのダンジョン産の巨大なコーヒー豆です。中の豆を取り出し乾燥までは自分でできましたが、さすがに大きすぎるので、煎るのは商業ギルドにお願いしました。今後自分で加工したければ、風味は多少落ちますが、豆を砕いて煎っても大丈夫とのことです。でもやはり美味しいのが一番！　また頼みに行きすので、そのときはよろしくお願いいたします。

このコーヒー豆を使って、コーヒーゼリーにムース、クッキーにミニケーキとティラミスもどき。ついついハッスルしてしまい、甘さ控え目な大人のスイーツタワーまで作ってしまいました。

コーヒー味のマカロンに、コーヒークリームのシュークリーム、そしてコーヒー生地のロールケーキ。これら三種をバランス良く配置したコーヒーミックスタワーです。

紅茶バージョンのティーミックスタワーを軽食のブースで提供したところ、男性に限らず皆様に喜ばれ、かなりのリクエストを受けてしまいました。

今回特にリピートしたいと言われたのが、クッキーとコーヒー豆トリュフです。

クッキーはコーヒー味の普通のクッキーですが、形が可愛らしくコーヒー豆を模しています。この形のクッキーは巷でも普通に販売されていますが、コーヒー味ではなくプレーン味なのです。皆様コーヒー味を気に入ってくださり、ぜひ売店での販売をと言われました。

コーヒー豆トリュフは洋酒を加えたチョコに砕いたコーヒー豆を混ぜて成形し、粉砂糖を振りかけたもので、完全に大人向けのお菓子です。ワインと一緒に食べたいと言われましたが本日はお茶会のため、残念ながらお酒は提供されていません。ご自宅で奥様とご一緒に楽しまれてはいかがでしょうか？

お客様のお声は大切な宝物です。新商品の企画と開発を早め、早々にテイクアウトでの販売をいたしましょう。

お茶会も無事に終了し、皆様への挨拶も済ませました。スタッフはすでに解散しています。辺境伯様もお孫さんであるお嬢様のお子さんを抱いて、先ほどお部屋に戻られました。それでは荷物をしまい、私たちも帰宅いたしましょう。

「アリー、この荷物で最後のようですね」

ルイスが次々と箱を運んできてくれます。

「ありがとう。まとめてしまうから、この上に置いてくれる？」

順に重ねられた箱たち。では順番にインベントリにしまいましょう。

「お嬢様が、アリーと話がしたいので帰宅する前に部屋に寄ってほしいと仰っていましたよ。何か大事な用でもあるのでしょうか？　なければ城下町に、あなたの下着類を買いに行こうと考えていたのですが……」

「ならこの荷物をしまう前に会いに行ってくるよ。今日はもう用事もないし、買い物くらいなら行く時間はあるよね？　ザックとミリィちゃんたちにも、何かお土産（みやげ）を買っていこうよ」

「そうですね。ではさっさと済ませましょう。初デートを楽しみましょう」

「下着を買いに行くのがデートなの？」

「異性と外出するのがデートです。私に全てお任せくださいね」

「下着はわからないから任せるしかないけど、ルイスとデートってのは……」

「そんなつれないことを言わないでください。アリーをお守りするのが私の使命です。あなたの行くところにはどこへでも行きますよ。ではさっさとお嬢様のところへ参りましょう。お手をどうぞ」

キザすぎる……

「ルイス、なんか変だよ。普通にしてよ」

「私は普通ですよ。アリーこそどうかなさったのですか？」

こら！　ち、近すぎる。顔を近付けるな！　そんなに覗（のぞ）き込まないでー。

「普通じゃないです！　顔が近すぎます！　ルイスの顔は綺麗すぎて、あまりに近いと恥ずかしいの！」

「……」

沈黙しないで普通に話をしてください。

「……それはまた可愛らしい恥じらい方ですね。つまり私を意識してくださっているからなのでは

ありませんか？　ほら……耳まで真っ赤ですよ」
ル、ルイスのバカ！　意識なんてしてないってば！　わー首に腕を回さないでー！　な……なんでいきなりこんな状態に……
「赤くありません！　違います！　女の私より綺麗で美人さんだから恥ずかしいの！　なんだか自分がいたたまれないじゃない……」
「……」
とにかくキザすぎるの！　いちいち間を置かないで！　何も考えなくていいから、とにかく早く離れてほしいです。
「男に対して綺麗や美人は褒め言葉ではありませんし、いたたまれなくなんてないですよ？　アリーは可愛らしくて食べちゃい――」
「あっ！　いたー！」
ルイスがふざけている間に、お嬢様ご本人が来ちゃったじゃない！
「アリー？　遅いから迎えに来ちゃった。少しお話をしてもいいかしら？　ルイスに頼んだのだけど、まったくの役立たずね」
「……」
「だけど、ルイスも同席してほしいわ。デートはあとで良ければプランを考えてあげるわよ」
「……」

私とルイスはお嬢様のお部屋に通され、お茶をご馳走になることになりました。何か不都合が出たのかと心配してしまいましたが、どうやらそうではないようです。
「我が家で真っ先に新しいものを披露してくれてありがとう。感謝するわ。お礼は何がいいかしら」
今回のお茶会で使用したダンジョン産の食材たちは確かに今日が初お披露目となりましたが、辺境伯家やお嬢様を贔屓しているからではありません。
しかも、聖なるダンジョンはこれから大々的に売り出されていくので、ビッグフルーツも海産物も、これからはお手頃に出回ると思います。
「まったくアリーは欲がないのね。流行の先取りは貴族のステータスよ。更にはみんなに今日のお菓子のレシピを伝授してくれたのでしょ？　我が家の料理人たちが大喜びしているわ。レシピは料理人にとって大切なもの。そのお礼くらいさせて。でないともう、アリーにお仕事を頼めなくなってしまうわ……」
お嬢様……
今回のお茶会では、スイーツタワー以外のところでも、ダンジョン産のフルーツの特性を大いに活用しました。特にその大きさを活かし、遊び心を表現したのです。
ロングバナナのそのままチョコレートがけに、巨大リンゴの丸ごとアップルパイ、大きなメロンをくり抜いて器にしたフルーツポンチ、大きなベリー類は凍らせてシャーベット風に。
もちろんフルーツそのものもそのまま飾り、ご希望に合わせてカットして盛り合わせ、数種のア

イスクリームや生クリームと組み合わせてフルーツパフェやデザートプレートとしてもアレンジしました。特にプリンアラモードは大好評だったのです。

しかしレシピを喜ばれたというより、単にダンジョン産のフルーツが珍しかったのではないでしょうか？　レシピ自体は普通のものです。

しかしお嬢様曰く、重要なのは発想の転換だそうです。

例えば大きなフルーツですが、普通なら小さくカットしていつもと同じお菓子を作ります。私も、バナナを刻んでシュークリームに入れました。しかしそれをせずに本来の大きさを生かすという発想が、とても斬新だと喜ばれたそうです。

更にはその場でパフェを作ったり、焼きたて丸ごとアップルパイを切り分け、冷たいアイスを添えたりと、いわゆるパフォーマンスと言われるものも行いました。これは今までのお茶会ではなかったことで、好みに合わせて楽しめると、会場では大盛り上がりしていたそうです。

確かに、通常のお茶会でスタッフがお客様のお皿に取り分けることはありますが、個々に好みを聞いてパフェにしたり、デザートをプレートに盛り付けてデザインしたりはしませんね。しかし、まさか初めての試みだとは気付きませんでした。食堂ではお客様のお好みに合わせてアレンジするのは当たり前、貴族様にも通用して良かったです。

実はこちらの厨房の方々に、このパフェとデザートプレートの盛り付け方を聞かれました。特に小さなお子様向けのデザートは、食べられる食材が限られてしまうので、どうしても盛り付けが簡素になってしまいます。それをなんとかしたいと相談されたのです。

そこで提案したのが、お皿の空いたスペースを活用する方法です。チョコレートで動物の絵を描いたり、フルーツでお花を模しても素敵ですね。子供たちも喜んでくれるでしょう。

このお茶会でのパフォーマンスは、後の辺境伯家のお茶会名物となり、聖なるダンジョン産の食材人気にも寄与したそうです。

「ではお礼は後ほど、楽しみにしていてね。そしてこれからの話が大切なことなの。まずはこの袋を確認してくれるかしら？」

私はお嬢様から、大きめの袋を受け取りました。

袋を開き、あまりの驚きに息が詰まります。こ、これらは……

お嬢様は唖然とする私の手に、もう一つ箱を手渡してきました。促されて箱を開けると、百合をデザインした宝石箱らしき小箱が入っています。

お嬢様が小箱の鍵を開けてくれました。中には、白と黄色の百合の花がデザインされた銀色のブローチと、同じデザインの指輪が納められています。どちらも、花の中心には橙色の石が数個はまっています。

先に手渡された袋の中身は見覚えのある品ばかりでしたが、こちらの品には心当たりがありません。

「こちらの袋の中身はアリーのものよね？　実は、この宝石箱もこの袋に入っていたの。それはご

両親からアリーへのプレゼントよ。まだ完成してはいないんだけどね」
なぜお嬢様はこれらが私のものだったと知っているの？　この袋の中のものは、かつて私から両親を奪ったとある女の子が、私の部屋から持ち去ったものたち……。彼女は辺境伯家に勤めていたそうだから、お嬢様は彼女と面識があるし、私と知り合いだということも知っているでしょう。しかしどんな関係かまでは知らないはずです。どうして……
「私ね、彼女には命を助けられたから、その命を大切にしなくちゃと今まで生きてきたの。でもね？　社交界に出るようになって、たくさんの噂が耳に入ってきたわ。どれもこれも、信じたくないようなことばかり……」
辺境伯様からは、お嬢様には真実を伝えていないと言われていました。今のお嬢様が幸せならば、辛い過去の真実は必要ない。彼女の本性は内緒にしてほしいと、そう頼まれていたのです。だからお嬢様は、彼女が辺境伯家にいたときも、彼女の本性を知りませんでした。
「彼女は私を騙(だま)していたそうよ。私と父の前では、献身的な介護者で侍女だったの。でも裏では私のものを全て奪い、私に成り代わるつもりだった。私の婚約者すら懐柔されていたわ。父は途中で気付いたそうよ。知らなかったのはマヌケな私だけ。少しは疑ったのよ？　でも信じたかったの。騙(だま)されているとしても、友達でいてくれるならそれでも良かった。でも私は死にたくはなかったの……」
ずっと車イス生活だったというお嬢様。それを献身的に介助してくれた侍女。だからこそ、お嬢様は彼女の心を信じたかったのね。そして彼女は献身的な介護者を演じたまま、危うく死にかけたお嬢様を庇(かば)って死んだ。
私にとって親の仇(かたき)だったあのズルい彼女は、実はお嬢様にとっては命の恩人だったのです。
死んだ人間にはもう仕返しはできません。私は自分が幸せになって、彼女に見せつけてやりたかった。あなたなんて私の中にはもう存在していないと、再び出会ったならそう知らしめてやりたかった……
私はこんな風に考えてしまう、自分の醜(みにく)さが嫌いです。
「突然ごめんなさいね。それでね？　今更ながら私も現実を見なくちゃと、彼女の遺品を片付けていたの。そうしたら、それらが出てきたわ。アリー、あなたのものよね？　彼女の趣味とは違うし、鍵がかかっている品もある。気になって父に尋ねたの。父は重い口を開いてくれたわ。彼女は私にしたことをアリーにもしていたと、更にはそれ以上の罪深い行いをしたのだと……」
お嬢様……とうとう真実を知ってしまったのですね。
「私はしばらく立ち直れなかったわ。彼女に裏切られていたのが衝撃だったの。でも私も大人になった。しかも二児の母親よ。いつまでも父親に保護される泣き虫じゃいられないわ。父も旦那様も応援してくれたし、今日のお茶会ではアリーも疲弊(ひへい)した私を元気付けてくれたでしょ？　だから私もアリーを応援したいの」
この宝石箱には鍵がかかっていました。お嬢様は中身の確認のため、専門業者に鍵開けを頼んだ

そうです。中には折り畳んだ紙が数枚と、先の百合のアクセサリーが入っていました。この紙を見て、お嬢様はこの小箱が本来私に贈られるはずのものだと知ったと言います。

百合のアクセサリーをよく見て気付きました。

袋に入っていた見知らぬアクセサリー類は、たぶん母の若い頃のものだったのでしょう。母は百合の花が大好きでした。ここにあるアクセサリーには、全て百合がデザインされています。彼女は母の品にまで手を付けていたのですね。

私の誕生石のカーネリアン。ルビーは高くて残念ながら使えなかったけれど、成人するまでにはイヤリングとネックレスを用意したいと、両親は城下町の宝石店で積立てをしてくれていたようです。その領収書が一緒に入っていました。

「その宝石店に連絡をしたら、キチンと積立て記録が残っていたわ。ご両親がお願いしたデザインも保管されていたから、父が今回のお礼として続きを作らせているところよ。本当は今日間に合わせたかったんだけど、さすがに無理だったの。もう少し待ってね」

もう驚きすぎて……何がなんだかわかりません。頭の中がグチャグチャです。

両親のことを思うと悲しい……だけど私のためにと残してくれた宝石箱は嬉しい……お嬢様の気持ちが……辺境伯様の気持ちが嬉しくて……とても心が温かいのです。なのに胸が締め付けられるように痛いのです。目頭が熱くて……

「アリー、お願い泣かないで。私はアリーに勇気をもらったの。私は真実を知るのが怖くて逃げてた。彼女が私のヒーローでなくなるのが嫌だったの。でもね、人の口に戸は立てられないから、聞きたくなくても耳に入るの。それに……、私はアリーを傷付けていたでしょ？」

え？

「アリーにあの子の話をすると、いつもキラキラしている目から生気がなくなるの。私は知らずに彼女の話をたくさんしていたわ。その度に辛い思いをさせたわよね。私のために黙っていてくれてありがとう。私はもう大丈夫。だからアリーも頑張りましょう！」

お嬢様が私の手を力強く握り締めます。

「彼女を許す必要なんてないわ。私だって許せない。だから私たちは彼女ができなかったことをたくさんしましょう。アリーも家族を作って、絶対に幸せになるの。まずはお洒落をして外出しましょう。良かったらこのあとお買い物に行きましょうよ。私がおすすめのお店を案内するし、お礼もあるから奮発しちゃうわよ！」

「お、お嬢様がですか？　それにお礼は、形見のアクセサリーの続きを作ってくださっていると……」

「それと私からのお礼は別よ。それよりアリー！　お嬢様ではなくライラと呼んでと言ったじゃない。子供は旦那様と父が見てくれているし、護衛にはうちのが二人と、ルイスもいるでしょ。何か買いたいものとかはあるのかしら？」

「そ……それなら……」

「女同士じゃない。ハッキリと言いなさいな」
「では……下着を買いに……」
は、恥ずかしいです。今までこういうことってなかったし……あら？　お嬢様が私をじっと見ている？　特に上半身を……どうしたのでしょうか？
「了解よ。アリー、もしかしなくても、下着を付けてないでしょ？　せっかく大きいのにもったいないわよ。まずは下着の採寸ね。しかし周囲の男性はウハウハだったわね……ルイス？」
「わ、私はそんな不埒な考えは……」
「いえっ！　ルイスは下着はキチンと付けろと……全身コーディネートするから、早めに買いに行こうと言われていたのです。女性としての慎みがないからと……」
「ふーん。でも下着はやはり女同士で買いに行きましょうね。可愛いのを選んであげる。ルイスでは変な心配をしちゃうわ。さあ今から行きましょう」
「では急いで荷物をしまってきます。少しお待ちください」
やはりわかる方にはわかるのですね。パンツしかはいていないのは、そんなに変なことなのでしょうか？　お店に行けばわかるかもしれません。

荷物をインベントリへしまって戻ってきたのですが……あら？　お嬢様とルイスはまだお話ししているみたい。扉を開けても気付かないし、声をかけた方が良さそうです。

「お二人ともお待たせしました！　ずいぶん話し込んでいましたね。もしかしてお二人は知り合いだったのですか？」
「アリー、お疲れ様です。ええ、私が神殿預りだった頃、お嬢様はよく辺境伯様に連れられて参拝されていたのです。歳が近いため、私がよく話し相手を任されていました」
へえー。
「さあ！　さっそく行きましょう。下着のあとはお洋服に雑貨屋さんね。食材なんかも見たいわよね。美味しいスイーツに、夕食も食べて帰りましょう。楽しみだわ」
お嬢様の選ぶお洋服……お値段は大丈夫でしょうか？　し、心配です……でもルイスもいるから大丈夫かしら？
さあ！　気分を変えて出発です。城下町の食べ物も楽しみですね。お料理やお菓子にも流行があり、日々の勉強が大切なのですよ。あ！　本屋さんにも寄りたいですね。

さて、久々の城下町です。仕事でちょこちょこ来てはいるのですが、いつもはリターンアドレスでとんぼ返りなのでゆっくり買い物なんて本当に久しぶりです。
私が修業していた頃と町並みは変わりませんが、お店はすっかり様変わりしていて寂しいですね。ですが城下町は全体的に華やかで賑やかで、町はもちろん行き交う人々までがお洒落な雰囲気です。
やはり若い方が多いからでしょうか、特に若い女性向けのお店が目立ちます。お洋服のお店だけ

でもたくさんあり目移りしてしまいます。そして目的の下着ですが……もちろん雑貨屋さんにパンツは売っていませんでした。下着類はランジェリーショップとして別にありました。所変われば品変わるということですね。

さあ未知なるランジェリーショップに突撃です！　……なんて勇気もなく尻込みしていた私は、お嬢様にグイグイと手を引かれての入店です。だってショーウィンドウのマネキンが着ている下着ってば……さすがにあれはないですよね？

「支払いは私に任せなさい！」

などといういきなりのお嬢様の宣言で、私はただいま着せ替え人形状態です。ここはランジェリーショップ内の採寸用のお部屋です。

とにかく恥ずかしいです。パンツ一枚の姿で周囲を取り囲まれ、至るところにメジャーを当てられています。穴があったら入り込んで泣きたいくらいです。でもルイスってバカなの？　これについてくるつもりだったの？

もちろんルイスは入口で待ったをかけられ、護衛のお二人と共に別室にて待機中です。当たり前ですよ！

私は今もパンツ一枚のみの姿で、次々に違う生地を当てられています。かなりの時間が経っているのですが、まだ下着の生地を決めているんですよ。生地が肌に合わないと肌が荒れるとか……私にはよくわからないので、お任せしてされるがままです。更にはサンプルの下着を当てられ、着用

の仕方まで教わりました。

ようやくパンツ一枚から解放されました。ルイスたちとも合流し、私はお茶をいただきながら休憩しています。

別の大きなテーブルには、何やらたくさんの本が積まれています。その本をああだこうだと捲(めく)りながら、お嬢様とルイスが真剣な顔で討論しています。

お二人の顔だけを見たら真面目に見えますが、話している内容は私の下着類と服についてです。下着のみならず服も仕立てると言われ、既製品で十分だと抗議したのですが……もうどうにでもしてください。

「アリー、必要な下着類と洋服は注文したわよ。サイズはこのカードね。カードは城下町周辺では共通だから、既製品でもこれを見せれば合うサイズを出してくれるの。今回のオーダー分は十日ほどで自宅に届くから、それまではこれを着用してね。一週間分が入っているわ」

お嬢様から袋を受け取ると、中には下着のセットが七組と、シンプルなワンピースが数枚、他にシャツやスカートにショールまで入っています。私の普段着にしてはかなり高価なお品ですが、シンプルながらも素敵なデザインです。

あれ？　別の袋に、パジャマや前掛けが入っています。それからこの可愛い小袋の中の石は、温石でしょうか？

「アリーは食堂ではいつも前掛けをしていますよね。そちらは私からのプレゼントです。パジャマ

は暖かそうでしたので、これからのシーズンにちょうどいいかと。温石は魔石です。保温の魔法が込められていますから、寝る前にポケットに入れてください。湯たんぽ代わりです。女性は体を冷やしてはいけませんよ」

うわー。モコモコパジャマは気持ち良さそう。確かに夜は冷えるから、湯たんぽ代わりは嬉しいです。色々あるんですね。でも前掛けに付いたフリフリは恥ずかしいかも……

「それから私の名誉のためにも言い訳させてくださいね。いくら私でも、女性が採寸をするお部屋にまではお邪魔はしませんよ。既製品を買うだけなら洋服を着たまま採寸をしてもらえます」

……確かにそうよね。私もつい失礼なことを考えていました。

「お気遣いにプレゼントもありがとう。何かお礼しなくちゃね。それに、失礼なことを考えてごめんなさい。確かにルイスなら、わざわざ私のことを覗かなくても見慣れてるわよね……」

「デートで男性が贈るプレゼントにお礼はいりませんが……はて？　見慣れているとはどういう意味でしょう？　まさかザックがいらぬことを吹き込んだのですか？」

いきなり肩を掴まれてビックリ。ル、ルイスッ！　い、痛いよ！　肩をガクガク揺すらないでー！　目が回るー！

「うっ……ザックは関係ないよ。だってルイスは綺麗だから、わざわざ覗かなくても自分で見慣れてるのかと……」

「はぁ……アリー？　これはまた妙な方向へいきましたね。私はナルシストではないのです。己の

顔や裸体を愛でる趣味はありません。おかしな誤解はしないでくださいね」

ふーん。

「アリー、ルイスは変態ではないから大丈夫よ。傷一つ残してたまるかと、回復魔法の精度を上げまくっていたときは、正直私も疑ったわ。このナルシストが！　ってね。でも確かに覗く必要はなかったわよ。見かける度に裸同然の痴女に服を破かれて、追いかけ回されていたもの。逃げ切ったあとのあの一言！『くそババアは死ねばいいのに！』は忘れられないわー」

「その追い回されるいたいけな少年を、トイレの扉の陰からニヤニヤと覗いていたのはどなたでしたか？　神殿のトイレに車イスは入りましたっけ？　しかも当時はまだ腰かけ式ではなかったはずですよね？　中で這いずったら穴に落ちますよ」

お嬢様とルイスは、とても仲良しさんなのですね。

さて、ランジェリーショップを出て城下町を歩いています。私とお嬢様が並んで歩き、その後ろにルイス、やや離れて、お嬢様の護衛二人が続きます。

「さあ、お次は宝石店へ！　と行きたいところだけど、アリーは絶対に首を横に振るわよね？　無理やり連れていってもつまらないし、ダンジョンでもかなりドロップしたようだから、今回はウィンドウショッピングといきましょう。アリーのお菓子には負けるけど、城下町には美味しいスイーツ屋さんもたくさんあるの。さあ行くわよ！」

「はい。お嬢様、ありがとうございます。ルイスも色々とありがとう」
「ライラよ。いつもそう呼んでとお願いしているのに……駄目なの？」
「……」
「呼ばないと返事しないんだから！」
「ライラ……ありがとうございます」
「くぅーっ。やっぱりアリーは可愛らしいわね。私には兄弟姉妹がいないから、特にそう感じちゃうのかしら？　本当に食べちゃいたいくらいだわ。ルイスにはあげません！」
ラ、ライラ！　苦しいです。むっ、胸に押し潰されてしまい息が苦しいです……っ。
「こら！」
ぷはー。すぐにルイスが引きはがしてくれて助かりました。
町歩きを再開しましょう。
雑貨屋さんにお花屋さん。どこも品揃えが豊富で、あれもこれもと欲しくなってしまいます。城下町の市場は他国の品もたくさん扱っていて、見知らぬ食材の宝庫でした。でも気を付けていないといつの間にか、ライラにあれもこれも買われてしまうのです。
「アリーはもう欲しいものはないのかしら？」
「本当に十分です。これ以上見ていたら、更に買われちゃいそうで怖いです。本当に今日はありがとうございました」

夕食はレストランを予約してくれると言われたのですが、屋台の並ぶ広場で色々と食べまくり、もう入りません。
最後に大きな本屋さんに寄って、私も数冊購入しました。ルイスも両手に本を抱えて戻ってきました。大丈夫かな？　と心配したのですが、マジックバッグに収納しています。そうですよね。ルイスたちは冒険者なのです。マジックバッグ持ちでした。大事なことを忘れてはいけませんね。
「オーダー品が届いたら、ぜひ連絡を頂戴ね。また近いうちに会いましょう。ルイスもね」
「私は特に会いたくはありませんね。まあ互いに邪魔にならぬなら、また会いましょう」
ルイスとライラは相変わらずです。
ふとすぐ脇の小道を見ると、手のひらで顔を覆い座り込んでいる男の子が見えました。具合が悪いのでしょうか？
あ……卵が落ちて割れてしまっています。聞けば、お使いで頼まれた卵を割ってしまったそうです。男の子は、お母さんがホットケーキを焼けないと、悲しそうに割れた卵を見ています。ならばと、私は雷白鳥の卵を取り出しました。
それを手渡そうとすると、少年は、一瞬ですが口角を上げて笑ったのです。見間違いかと確認する間もなく、突如発光した少年に足首を掴まれ、私もその光に呑み込まれてしまいました。
こ……この引きずり込まれるような感覚は……スキルか魔法かはわかりませんが、たぶん移動系のものでしょう。私はいったいどこに飛ばされてしまうのでしょう。誰か気付いてくれるでしょ

うか？
あ……お嬢様の護衛のお二人が、驚愕の表情でこちらを見ています。きっと気付いてもらえたでしょう。声を出そうとするけど、引きずる力に逆らうだけで精一杯です。
私はそのまま光に呑み込まれてしまいました。

＊　＊　＊　＊　＊

「ライラ！　アリーを見ませんでしたか？」
「つい今までルイスと話していたのに、わかるはずがないじゃない！」
「お嬢様！　アリー様がうずくまる少年に話しかけましたら、突如発光し、二人ともに消えました。あっという間の出来事で、痕跡すら残っていません。助けられず申し訳ございません」
「仕方ないわ。見ていてくれてありがとう。しかし瞬間移動なら厄介ね。たぶん父が警戒していたスキル封じの魔術師よ。スキルを封じられてしまったら、アリーの命にも関わるわ。急ぐわよ！」
「あの宝箱の百合ですね。もしやとは思いましたが、スキル封じを警戒していたなら教えてください。あの場に私を同席させたのは、私の気持ちを試すためですか？　それでアリーが連れ去られては意味がありませんよ！」
「仕方ないじゃない。正直あなたはまだ、上層部には信用されていないのよ。己の仕出かしたこ

とを省みなさいな。まあ私は信用してあげる。だって聖女から逃げまくったせいで折檻され、独房に入れられても耐えたのに、ご飯抜きになった途端シクシク泣いていた、可愛らしいあなたですもの」
「……周囲に人がいなくなると歩行練習をしていたあなたは、聖女に車イスから投げ出されるとシクシクと泣いていました。あれは完璧な嘘泣きですよね？　そもそも、アリーに言った『死にたくはなかった』というあの言葉、侍女の本心も死のからくりも、あなたは全て知っていたのでしょう？　殺意を向けられなければ、手駒として使い続けるおつもりだった。辺境伯様も旦那様もすっかり騙されているとは……」
「最初は嘘泣きではなかったわ。あなただって同じでしょ？　互いに見て見ぬふりをした時点で同類よ。まあでも、話さなかったのは悪かったわ。スキル封じの魔術師を送り込んできたのは子爵側よ。正確には男爵の手駒ね。なんて説明はあとにしましょう。とにかくアリーを探さなきゃ！」
「はぁ……我が家のバカどもですか？　アリーの価値にも気付けないようなマヌケたち。私を利用するのに邪魔だからアリーを殺す？　火に油を注ぐだけなのがわからない単純な者ばかり。気付いて利用する気満々の大神殿側も大概ですが、まあ、殺意がないだけまだマシです。さあ、こうしてはいられませんね。早くアリーを見つけましょう」

＊　＊　＊　＊　＊

うーん。私は気絶していたのでしょうか？　一面、真っ白です。雪山でしょうか。
それよりお尻よ。地面にお尻をついてるからとても冷たいです。ルイスに冷えは禁物だと言われたばかり、慌てて立ち上がろうとすると抱えていた卵がつるりんこ。うわっと！　うっかり落とすところでした。
抱え直して頭上を振り仰ぐと、見知らぬ青年が私を見下ろしています。
「喋るな。面倒だ。俺がいなくなるまで立ち上がるな。余計なことをすると、今すぐにあの世行きだ。いい子ならわかるな？」
はあ？　もちろん言葉は理解できていますが、いい子ならってなんなのよ！　私は子供じゃないわよ！
ところであの少年はどこでしょう。無事なのでしょうか？　周囲を見渡しますが見当たりません。
「なんだかずいぶんと不服そうだな。まあいきなりこれでは不満もあるわな。だが文句は天国の神にでもボヤけ。お前はこの世から追放だとよ。死んでお貴族様の役に立てとさ。可哀想にな」
可哀想だと思うなら、私を殺そうとしないでください。
「同情なんていりません。私を元の場所に戻してください。私と一緒にいた少年は無事なのですか？　人をこの世から追放しようという輩には、話を聞く耳はないでしょうか？　赤の他人を巻き込まないでください。用があるのは私なんですよね？」

「……こ……この……ガキは……」
あ……まずいかな？　お尻の冷たさにイライラして、つい強気なことを……
「まったく可愛げのない女だな！　あの少年は俺だ！　騙しやすいからと、魔道具で子供に化けていたんだ。施しはしないと聞いていたから駄目元だったが、まんまと引っかかりやがって。やはり甘ちゃんだな」
「施しではありません。お手伝いを頑張っていた、偉い子にあげるお駄賃です！　ろくでなしの誘拐犯だったみたいですけど」
「……本当にくそ生意気な女だな。これのどこがいいんだ？　アイツの趣味は理解に苦しむな。だがなぜ俺が殺人までしなきゃならん。てなわけで、心優しい俺からのサービスだ。頑張ってこのダンジョンから自力で脱出してくれ。俺は手を貸さんし、スキルは封じさせてもらったからな」
私はどこかのダンジョンに連れてこられたのですね。それにしても……
「スキル封じって……」
「スキル封じが不思議か？　なら冥土の土産に教えてやるよ。俺はヒーラー（治療士）だ。スキル封じは、患者のスキルが治療の邪魔をする際に使う。魔力を食うから、俺の場合は一日に一度の使用が限界だ。まあお貴族様の犬をやらされてる俺には、宝の持ち腐れでしかないがな……」
ヒーラー？　確か病気治療に特化した治療士だったはず。
ならば瞬間移動は？　ただのヒーラーでは使えないはず。私のリターンアドレスとは、明らかに

発動の仕方が違ったけど……

うーん。考えても駄目です。まったく理解ができません。

お貴族様の犬……つまり依頼主は貴族で、この男性は頼まれただけ。私は貴族の誰かに恨まれているか、それとも邪魔なのかしら？　しかし殺すほどのことなの？　少しくらいサービスしてもらっても、スキル封じのせいでチャラにはなりませんし、私の護身術で勝てる相手ではないことくらいはわかります。でも……この世から追放なんて絶対に嫌です！

「個人的な恨みはないが、運命だと思って諦めてくれ。二度目の追放も、運があれば助かるんじゃないか？　まあ頑張ってくれ！　ではな」

……あっという間に消えてしまいました。

町中からダンジョン内へ飛んできたのだから、やはりスキルではなく魔法なのでしょう。瞬間移動の魔道具もあるけど、かなり貴重で、国宝級なはずです。しかも現在は術者が存在せず、新たな瞬間移動の魔道具を作製することはできません。

現存する品は血統の魔道具と呼ばれ、血族の血の誓いで継承されているのです。そんな血族の一員が、一介の貴族の駒になるとは思えません。

彼は、ホワイトハットでの追放のことを知っていました。それに、アイツというのは誰でしょう？　アイツの趣味と言うからには、アイツというのは男性で、私の知り合いなのでしょう。心当たりなんて……お兄ちゃんズかザックにルイスに……お客様やギルドの人たちくらいです。

それにしても……寒いです。考えていても埒があきませんので、素早く立ち上がり思考をまとめて行動開始です。

つまりあの少年は、町で困っていた子供ではなくたった今消えた誘拐犯で、現在この場には私だけしかいないのです。

自分の身の安全のみを考えましょう。これが一番大事なことですが、現在の私はスキルがまったく使えないのです。つまりスキルであるインベントリも使用できません。

もちろん抱えたままのこの卵も戻せず、しかもなぜかマジックバッグにすら入らないのです。

捨てていくのもなんなので、あとで食べてしまいましょう。いつも持ち歩いている非常袋と本日買ったものを、マジックバッグに入れておいて助かりました。

さあでは先に、寒さをなんとか凌ぎましょう。ルイスにプレゼントされたモコモコパジャマを重ね着し、温石を使えば、かなり暖かくなりそうです。

次に雪洞を掘ります。現状は吹雪いてはいませんが、かなり視界が悪いのです。そろそろ夜が近付いているのでしょう、むやみに歩き回らない方が得策です。

とりあえず自然の穴を使用し、横穴を掘ればたくさんは掘らずに済みそうです。穴の中に保温シートを敷き、寝袋を用意すれば完了です。

夕食は携帯ミニコンロで雪を溶かし、干し肉とドライ野菜とお米でリゾットにしましょう。乾パンに栄養補助のナッツバーもお役立ちです。もちろん黒パンにドライフルーツもあります。久々に

食べる、本格的な非常食を楽しみましょう。非常袋様々です。
干し肉のスープは体の芯から温まりますし、アレンジが色々とできて美味しいんです。
最後に魔物対策です。魔物避けはありますが、スキルが使用できないとなると、いざというときの得物が必要です。そこでこれです！
オリジナル護身用魔道具、その名も【殺っておしまい棒】です。
お兄ちゃんズと通った道場の師匠の弟さんが、道場の卒業祝いにと作製してくれました。
私の通常の武器は、クナイと手裏剣になります。これらはスキルが封じられても、通常の体術としての威力は保てます。しかしスキルとして使用する場合と比べれば、やはり威力は圧倒的に劣ります。そこで、スキルに依存しない護身用の武器にと、凄腕魔道具職人である弟さんが作ってくれたのです。
ちなみにお兄ちゃんズの卒業祝いの魔道具は、使用魔力減少と魔法威力増大を付加された指輪、【減らして増やす輪】です。それぞれの魔道具のネーミングは師匠なのですが……
お兄ちゃんたちは剣士です。個別に信仰心と魔法のスキルはありましたが、二人とも魔力が少なく、様々な魔法を使用することはできません。それを克服するための魔道具をプレゼントされ、存分に使いこなすことで、二人はSランクにまで上り詰めました。
もちろん魔道具のおかげだけではありません。魔法の詠唱を高速で複数行うことにより、たくさんの魔法陣を同時展開するという技の習得。二人の連携魔法でより強力な魔法を生み出し、更には

立ち読みサンプルはここまで

オリジナル魔法まで生み出しているのです。
とにかくすごいの一言に尽きます。
魔法陣の同時展開なんてなかなかできません。魔力の多いルイスでさえ、習得できずに唸っていましたからね。
さあでは、私もこの魔道具を使いこなしましょう。
見た目は十五センチほどの棒です。手のひらにジャストなサイズで、力を込めて握ると光の刀身が出現します。刀身とはいえ、そのものには切りつけるなどの殺傷能力はありません。
光る刀身はホログラムのようなもので、雷の電撃を纏わせることで威力を発揮します。光る刀身を突きつければ、相手に五段階のレベルの電流を流し込みます。振れば突かずに相手に電撃を飛ばせますし、また光の刀身を硬化させることも可能で、ダイヤ並みに硬くなるそうです。
つまり硬化させれば、物理的にぶっ叩くことも突き刺すことも可能。しかも雷の最上級レベルは、ドラゴンをも痺れさせる稲妻級だとか？　さすがにこれは言いすぎでしょうが、かなりヤバい品物かもしれません。
光の刀身の先から、催涙ガスを発射したりもできるそうですが……護身用とはいえ、さすがに怖くて町では使えないです……
さてご登場の【殺っておしまい棒】ですが、必要ないことを願いましょう。まあ無理でしょうがね。